

埼臨技 だより



発行所 公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会 〒330-0072 さいたま市浦和区領家7-14-7
TEL 048(824)4077 FAX 048(824)4095 URL:<http://www.sairingi.com/>
携帯URL:<http://www.sairingi.com/keitai/index.html> X(旧Twitter): @sairingi

第53回 埼玉県医学検査学会のお知らせ

開催日：2025年12月7日(日)

開催場所：ソニックシティ

テーマ：Hop Step Jump

サブテーマ：～ 飛躍する未来に向けて、今学ぼう ～



～ 飛躍する未来に向けて、今学ぼう ～

【特別講演・市民公開講演等のお知らせ】

第53回埼玉県医学検査学会にて事務局（運営・書記兼務）を担当しております、株式会社TLC戸田中央臨床検査研究所の山崎淳也です。学会開催までいよいよ残り1か月となり、現在、実行委員一同は、参加されるみなさまにとって有意義な時間となるよう、タイムスケジュールの最終調整や会場の準備を進めております。今回の埼臨技だよりでは、特別講演および市民公開講演の内容についてご紹介いたします。

特別講演では、まず「超音波のパニック所見症例とその対応」と題し、全国学会でもご活躍中の3名の先生方をお迎えして、それぞれの専門分野における緊急性の高い症例への対応について、実践的な視点からご講演いただきます。続いて、「なぜ今、技師会で災害対策に力を入れるのか」というテーマでは、日本臨床衛生検査技師会事務局の板橋氏、埼玉県臨床検査技師会の松岡会長、そして能登半島地震の被災地派遣経験をお持ちの埼玉医科大学病院・野村氏の3名をお迎えし、災害時の活動や行政との連携について、検査技師としての社会的役割を再認識する貴重なお話を伺います。

市民公開講演では、地域のみなさまにも楽しんでいただけるよう、三つのプログラムをご用意しております。まず一つ目は、さいたま赤十字病院 検査部長・天野雅子先生による「流行感染症にかからない・うつさないためにできること」と題した講演です。感染症対策の基本から最新の知見まで、日常生活に役立つ情報をわかりやすくお話しいたします。二つ目は、埼玉県庁医療整備課による「AI救急電話相談について」の講演です。急な病気やけがの際にチャット形式で相談可能なAI搭載サービスについてご説明いただきます。本サービスは国内初の取り組みとして注目されており、医療支援の新たな可能性を示す内容となっております。三つ目は、埼玉県立伊奈学園総合高等学校吹奏楽部による演奏「音楽は癒し」をお届けいたします。音楽には、ストレスの軽減や情緒の安定など、心身に良好な影響をもたらすとされており、日々の疲れを癒したい方にとって心安らぐひとときとなることでしょう。

今回の学会テーマ「Hop Step Jump」のとおり、みなさまにとって学びと交流のある充実した時間となるよう、実行委員一同、心を込めて準備を進めております。学会当日には、ぜひ多くのみなさまに足をお運びいただき、充実した時間をお過ごしいただければ幸いです。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 事務局兼運営 山崎淳也)

【学会ホームページ作成を経験して】

第53回埼玉県医学検査学会の運営部として、学会ホームページの作成・更新を担当しております、川口市立医療センターの比嘉良瑚と申します。

私生活ではSNSやブログなどをほとんど利用したことがなく、ホームページ作成を担当することになった際には、「そもそもどうやって作るのか？自分に務まるのか？」と、漠然とした不安を抱いておりました。手探りの状態からのスタートでしたが、第51回・第52回学会ホームページを担当された柿沼様と脇谷様より、温かく丁寧なご助言をいただき、少しずつ形にすることができました。お二人のご助言とご配慮に、心より感謝申し上げます。

学会まで残り1ヶ月を切り、準備中だったページも随時公開しております。学会の魅力を少しでも多くの方に感じていただけるよう、試行錯誤を重ねながら準備を進めてまいりました。本学会へのご参加を心よりお待ちしております。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 運営部 比嘉良瑚)

【運営部を担当して】

第53回埼玉県医学検査学会実行委員会にて運営部を担当しております、獨協医科大学埼玉医療センターの松本祐弥と申します。

私が担当する運営部は、他部門との兼務を含めて7名の委員で構成されています。発足から約1年が経過しましたが、私が感じる運営部の最大の強みは、島村運営部長を中心としたチームワークの良さです。発足当初から連絡を密に取り合い、私が困ったことを相談した際には、委員の皆さんが親身に対応してくださり、迅速なレスポンスに幾度となく助けられました。定期的に部会（という名の飲み会…？）を開催し、親睦も深めてまいりました。

学会当日は、これまで培ってきたチームワークを活かし、縦横無尽に会場を駆け回る運営部の姿にぜひご期待ください！

私自身の活動の一つとして、日程表の作成に携わらせていただきました。当日の参加者の動きや各分野の導線を考慮しながらスケジュールを組み立てる作業は、壮大かつ難解なパズルを解いているような感覚でした。これまで何気なく見ていた学会の日程表が、実は多くの苦労を経て作られていることを知り、大変貴重な経験となりました。本学会の日程表も、瀧沢学会長、野本実行委員長、高橋学術部長と議論を重ねながら作り上げました。埼臨技会誌の学会特集号がお手元に届きましたら、ぜひご覧ください。

運営部の活動とは少し離れますが、私は普段、病理細胞検査に従事しております。本学会では、病理5題、細胞4題と、近年では稀に見る多くの一般演題の登録をいただきました。当日は病理・細胞合同の研究班企画もございますので、関係者の皆様におかれましては、ぜひ会場に足をお運びいただき、活発な討論で会場を盛り上げていただけますと幸いです。

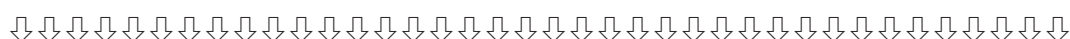
この原稿が掲載される頃には、学会開催まで約1ヵ月となっているかと思います。過去に運営部を経験された方によると、開催1ヵ月前から運営部の業務はさらに多忙を極めるとのことです。今から戦々恐々としております。そんな中、「学会に参加します!」「楽しみにしています!」といった皆様からの温かいお言葉が、大変励みになっております。

より良い学会となるよう、最後まで全力で駆け抜けてまいります。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 運営部 松本祐弥)

(文責：第53回埼玉県医学検査学会 運営部 松本祐弥)

アプリをダウンロードしてお待ちください



Google Play



App Store



検査室管理運営委員会 研修会報告

臨床検査技師の可能性を検査室の外に示す！ ～2040年問題を見据えて～

令和7年9月25日(木)19時より検査室管理運営研修会が開催された。講師にアボットジャパン合同会社の梶優展氏、大喜田法子氏をお招きし「臨床検査室外での役割と高齢化による医療課題への対応」について講演があった。以下、委員・参加者から感想を掲載する。

川康正会総合クリニック

安田 卓矢

「臨床検査技師の可能性を検査室の外に示す！ ～2040年問題を見据えて～」をテーマにWeb講演が開催された。前半はアボットジャパンの大喜田氏から2040年に入院医療の需要がピークを迎え、外来医療は2025年以降減少する一方で、在宅医療や訪問看護の需要が増加すること、埼玉県の人口推移と医療需要の変化、さらに医療DXの必要性について講演があった。後半は梶氏から理想から課題を抽出する方法、変化できない理由、アンコンシャスバイアス、教育・指導の問題点、心理的安全性、検査技師の検査室外での活動提案などの講演があった。



今回の講演で昭和型の指導スタイルから脱却し、世代に応じた柔軟な指導が求められると感じた。また、安心して意見が言える環境（言いにくいことを言える環境）・信頼と尊重の文化・失敗を学びと捉える姿勢などの心理的安全性を高め、各スタッフの生産性がある『イキイキ仕事ができる・遣り甲斐のある』環境を整えていきたいと思った。また、検査技師の存在意義を示すためには、他職種が参加する学会で積極的に発表し、認知を広げることが重要であると共感した。現在、内視鏡室で医師・看護師と連携している経験を活かし、今後も他職種との関わりを深め、学会発表にも挑戦していきたいと考えている。

戸田中央総合病院

堀尾 悠人

今回、検査室管理運営研修会に参加した。その中でも私が特に興味を抱いた内容は教育・指導の問題点という部分であった。私も社会人2年目となり後輩に指導することもあるため、この講演を通じて教育・指導に関することを学び、今後の仕事に活かしていきたいと思ったからだ。職場にはもちろん色々な世代の方がおり、バブル世代からZ世代までさまざまであり、また考え方もそれぞれである。例えば、上の世代の人ほどサービス残業などの根性論、若い世代は残業しないなどといった考えがあり、この世代間でギャップが生じることが指導の問題のひとつであると学んだ。相手に対する無意識の思い込みや偏見により教育の難易度が上がっているように感じた。これを解決するには無意識の思い込みをなくし、世代間の認識の違いがあることを考慮してコミュニケーションをとり、業務に取り組んでいくべきだと思った。自分自身も後輩に対して指導・教育する際には以上のことを念頭に置き、行動していくようにしたい。他にも医療における2040年問題や埼玉県の医療需要推計など普段あまり耳にすることがない情報も学ぶことができ、自身の知識を深めることができたと感じた。



今後もこのような研修があれば積極的に参加していき、日々の業務に活かしていけることがあれば学んだことを行動に移し、業務に励んでいきたいと感じた。

研究班研修会報告

テーマ 凝固検査から読み解く止血異常の実際と課題

主催 血液検査研究班

実施日時：2025年8月29日 19時00分～21時00分

会 場：RaiBoC Hall 市民会館 おおみや 集会室1 教科・点数：専門教科－20点

講演 1 凝固検査の基礎知識から異常値対応の考え方まで
～薬剤影響の異常値・クロスミキシングテスト実施報告まで～

講師 1 須長 宏行（積水メディカル株式会社）

講演 2 時とともに変わる凝固プロフィール ～検査技師の視点でみる症例解析～

講師 2 中山 智史（防衛医科大学校病院）

参加人数：会員40名 賛助会員6名

出席した研究班班員：中山智史 堀口大介 澁川絵美 加藤鉄平 石田沙妃 窪田勝己
山崎淳也

研修内容の概要・感想など

講演1では、凝固検査の基礎となる凝固因子の性質、測定系の反応過程、治療薬による測定値への影響、クロスミキシングテストの測定から結果の見方についての講演が行われた。凝固検査は、凝固線溶系の病態把握、治療効果判定、先天性凝固因子欠損の診断など、様々な場面で行われている。しかし、検査前の工程や患者の持つ既往、行われている処置や投薬が正確な判断を難しくするため、測定値に影響を及ぼす因子を把握しておく必要がある。自動分析装置が行っている反応過程を改めて学び、凝固カスケードについても理解を深めることで、得られた測定値が患者の病態や治療効果を正しく反映しているかを判断しやすくなり、結果を解釈する上で重要であると感じた。クロスミキシングについては、使用する試薬の特性や測定準備、結果の判定から臨床への報告様式などの話があり、改めて凝固検査に対して見つめ直す講演であった。

講演2では、3症例が提示され、データの見方や考え方を学んだ。臨床検査で得られる測定値は疾患や病態だけを示すものではなく、検査前の工程や治療や投薬状況を含んだものも多い。凝固検査では、採血時の検体不良や抗凝固薬の使用による異常データが取り上げられることが多いが、抗菌薬投与によるビタミンK欠乏やステロイド治療になどでも検査値の変動が見られ、初回値と治療開始後の値差から投薬による影響に気が付く場合もある。検査結果を正しく判断するためには、疾患に対する知識だけではなく検査前プロセスや治療、投薬についての知識も必要であることを改めて感じる講演であった。

（文責：加藤鉄平）

テーマ 心エコー典型症例検討会 ～各疾患のチェックポイント～

主催 生理検査研究班

実施日時：2025年8月30日 14時30分～16時00分

会 場：ソニックシティビル 602会議室 教科・点数：専門教科－20点

講演 1：大動脈弁狭窄症

講師 1：丸山 萌（かわぐち心臓呼吸器病院）

講演 2：僧帽弁閉鎖不全症

講師 2：松平 悠（さいたま赤十字病院）

講演 3：肥大型心筋症

講師 3：野村 和弘（埼玉医科大学病院）

講演 4：拡張型心筋症

講師 4：井上 翔太（東京大学医学部附属病院）

参加人数：会員88名

出席した研究班班員：南雲涼太 工藤淳子 間中樹里 野村和弘 松平悠 草間冬子

研修内容の概要・感想など

約2年ぶりに現地での講義形式の研修会を開催した。テーマは「心エコー典型症例検討会～各疾患のチェックポイント～」とし、日常に遭遇しうる疾患について、4名の技師による講義がおこなわれた。大動脈弁狭窄症について、丸山氏が講演をおこない、連続波ドップラ波形を記録する際、エンベロープのノイズ部分、いわゆる「ひげ」の部分避け、トレースすることが正確な評価につながるのとことであつた。松平氏からは僧帽弁閉鎖不全症についての講演で、各弁葉からの逆流がどのような方向に起こるかを一覧にして提示していた。また僧帽弁逆流の機序についても説明があつた。肥大型心筋症については野村氏が講演をおこない、心尖部肥大型心筋症の心尖部瘤は場合によってはリニアプローブや小児用セクタプローブを使用するなどのテクニックが紹介された。井上氏からは拡張型心筋症についての講演で、他の疾患に比較し、特有のテクニックは用いないが、左室駆出率をはじめ、内腔計測や右心系項目の測定を正しくおこなうことが患者の予後につながるのとことであつた。

心エコー関連の勉強会は中級から上級者向けのものが多く、今回のような初級者向けの研修会が不足しているように感じている。今回は現地開催であり、聴講者の人数が心配であつたが、実際には満員御礼となったことから需要の大きさを感じた。

研修会後には「心エコー好きのための懇親会in大宮」と題し、懇親会を開催した。26名もの参加があり、会は大盛況であつた。このような情報共有の場がもてることも現地開催のメリットであると感じた。今後もWeb開催と現地開催を両立し、より効果的な運営をおこなってきたい。

(文責：南雲涼太)

テーマ 2025年認定試験直前!! スライドセミナー 第1弾

主催 細胞検査研究班

実施日時：2025年9月12日 18時00分～19時30分

会 場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点

講 演 1：婦人科領域

講 師 1：森 康浩（学校法人冬木学園 畿央大学）

講 演 2：呼吸器領域

講 師 2：野本 伊織（埼玉県済生会川口総合病院）

講 演 3：乳腺・甲状腺・リンパ節領域

講 師 3：鶴岡 慎悟（独立行政法人地域医療機能推進機構埼玉メディカルセンター病理診断科）

参加人数：会員146名 学生49名

出席した研究班班員：鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 野本伊織 猪山和美 稲山拓司

小川弘美 並木幸子 加藤智美 中山美咲

研修内容の概要・感想など

本研修会は細胞検査士認定試験の対策を目的として企画し、今回は第1弾として婦人科、呼吸器、乳腺・甲状腺・リンパ節の各分野についてWeb上で開催した。参加者は会員146名、学生49名で、他県からも多数の会員が参加した。研修内容は、過去の認定試験で出題された症例を中心に、各分野で10問ずつ（合計30問）の代表的な症例を取り上げ、画像を供覧しながら問題を解くテスト形式で行った。

婦人科分野では森氏が子宮頸部のLSILや扁平上皮癌、卵巣の漿液性癌などの典型症例について解説し、呼吸器分野では野本氏が喀痰や気管支洗浄液などに現れる異型細胞の特徴を、基礎知識と一次試験対策を併せて解説した。乳腺・甲状腺・リンパ節分野では鶴岡氏が、乳腺の顆粒細胞腫や甲状腺の髄様癌など、日常業務ではあまり見かけない症例も含め、細胞の特徴を解説した。

テスト形式で研修を行うことで、参加者は自身の理解度や出題傾向を把握することができる。今後も参加者への一助となるような研修会を企画していく必要があると考える。

(文責：並木幸子)

テーマ 多発性骨髄腫および分子標的治療薬等による 抗グロブリン試験への影響

主催 輸血検査研究班・血液検査研究班合同

実施日時：2025年9月19日 19時00分～20時30分

会 場：RaiBoC Hall 市民会館 おおみや 集会室8 教科・点数：専門教科－20点

講演 1：多発性骨髄腫 ーどんな検査で、何がわかる？

講師 1：堀井 洸佑（地方独立行政法人 埼玉県立病院機構埼玉県立がんセンター）

講演 2：分子標的治療薬等による抗グロブリン試験への影響

講師 2：丸橋 隆行（株式会社 カイノス学術部）

講演 3：輸血検査の実際

講師 3：小島 みなみ（地方独立行政法人 埼玉県立病院機構埼玉県立がんセンター）

参加人数：会員43名

出席した研究班班員：

（輸血検査研究班）宮澤翔子 岸健太 岩崎篤史 廣田渉 佐々木翔太 大垣秀友 志村祥太

（血液検査研究班）澁川絵美

研修内容の概要・感想など

今回は多発性骨髄腫および分子標的治療薬等による抗グロブリン試験への影響をテーマとして、輸血・血液検査研究班合同で研修会を行った。

堀井氏の講演では多発性骨髄腫の病態や検査法、診断基準、治療薬等について詳しい説明があった。多発性骨髄腫患者では血液型ウラ検査や不規則抗体検査等で異常反応がみられることがあり、問題解決のためにカルテで疾患名や使用薬剤などの手がかりを見つけ出すことが大切であると感じた。

丸橋氏の講演では、多発性骨髄腫の治療薬（抗CD38抗体）が不規則抗体スクリーニングおよび交差適合試験等の間接抗グロブリン試験に及ぼす影響についての説明と、その対処法としてDTT処理赤血球の作製法、DTT処理赤血球による抗グロブリン試験の手順についての解説があった。また抗CD38抗体を中和することができる可溶性リコンビナントタンパク質試薬（Grifols sCD38）について紹介があり、DTT処理赤血球作製法より短時間で処理が可能であり、迅速な輸血製剤の提供に寄与できると思われる。

小島氏の講演では、日本輸血・細胞治療学会が推奨する一般的なDTT処理赤血球作製法を改良し、より簡易的に短時間でできる処理方法について丁寧な説明があった。血球洗浄操作を自動血球洗浄装置で行うことで検査所要時間を大幅に短縮することができ、当日の輸血依頼であっても円滑に輸血製剤の準備が行えるという利点がある。また、その他の業務を並行して行うことが可能となるため、特に人手が不足している施設の受講者にとって非常に参考になる内容であった。

抗CD38抗体が患者に投与されていることに気がつかなかった場合、異常反応の問題解決に時間を費やし、輸血製剤の準備に遅れをきたすことが予想される。今回の講演で得られた内容を日々の業務に活用することで、より安全で迅速な輸血製剤の提供につながると考える。

（文責：岩崎篤史）

テーマ 疫学にも役立つ感染症検査について

主催 微生物検査研究班

実施日時：2025年9月19日 19時00分～20時30分

会 場：ソニックシティビル 905会議室 教科・点数：専門教科－20点

講演 1：遺伝子検査キットの活用方法 ～POTキットを中心に～

講師 1：湯藤 嘉文（関東化学株式会社）

講演 2：結核の疫学とIGRA検査について

講師 2：藤原 一隆（株式会社レビティジャパン クリニカル営業部）

参加人数：会員19名 賛助会員5名

出席した研究班班員：小棚雅寛 酒井利育 今井芙美 岸井こずゑ 佐々木真一 伊波嵩之
大塚聖也

研修内容の概要・感想など

疫学にも役立つ感染症検査として遺伝子検査とIGRA検査に関する内容の研修会を開催した。

講演1では湯藤氏よりPOT法、PFGE法、MLST法などの分子疫学解析について解説があった。分子疫学解析とは、個々の菌株が持つ遺伝子を解析し、同一か否かを判定する手法である。かつて主流であったPFGE法はすでに装置が販売終了となっており、MLST法はシーケンサーを必要とするため、どの施設でも実施できるという訳ではない。一方、POT法は汎用装置（サーマルサイクラー、泳動装置）があれば測定可能であり、前者2つと比べると導入しやすくなっている。POT法ではバンドの有無により3つのPOT値が算出される。この3つの値が一致した場合、同一菌株であると推定することができる。実際の運用事例についての解説もあり、大変参考になった。そのほかの感染対策に役立つ遺伝子検査として、薬剤耐性遺伝子やCD毒素遺伝子検出キットの紹介もあった。感染症法が改正となり、ステルス型CPEもCRE感染症の届出対象となっている。ステルス型CPEの届出には、遺伝子検査またはイムノクロマト法によるカルバペネマーゼの証明が必須となっている。現在カルバペネマーゼ遺伝子についてはコンベンショナルPCRキットのみの販売となっているが、リアルタイムPCRキットも開発中とのことで今後に期待したい。

講演2では、藤原氏より結核の疫学とT-SPOT検査について解説があった。結核は三大感染症（エイズ/HIV、マラリア、結核）のなかで、死者数が最も多い感染症である。日本の結核罹患率は結核低まん延国の水準である10.0を下回っているが、一部地域ではまだ罹患率10.0を超えており、地域差が大きくなっている。また、新登録結核患者の年齢は二極化しており、若年層では外国生まれの患者が多く、高齢者では免疫低下による再燃の患者が多くなっている。現在、外国生まれの結核患者の多くを占めるフィリピン、ネパール、ベトナムからの入国者を対象に、入国前結核スクリーニングが実施されている。胸部レントゲン検査や医師の診察により、結核を発症していないと判断された場合には、証明書が発行され入国が可能となっている。本スクリーニングは今年開始されたばかりであり、今後の新登録結核患者数の動向に注目したい。免疫低下による結核再燃の要因としては、ステロイド使用やがん免疫療法があげられる。これらの治療を行う患者においては、T-SPOT検査を用いたスクリーニングが有用とされている。これまでのT-SPOT検査は煩雑な前処理が課題となっていたが、今回検体前処理の自動化を可能にしたT-cell selectキットの紹介があった。本キットを用いることで、検査開始までの保存時間が54時間まで延長している。ほとんどの医療機関でT-SPOT検査は外部委託となっているため、提出可能時間の延長はまさに朗報である。

今回、2つのテーマについて疫学や検査の活用法の解説があった。本研修会の内容が、日々の業務や自施設の感染対策の参考になれば幸いである。

（文責：今井芙美）

テーマ 尿沈渣検査を始める前に③ ～ 異型細胞について ～

主催 一般検査研究班

実施日時：2025年9月26日 19時00分～21時00分

会 場：RaiBoC Hall 市民会館 おおみや 集会室1 教科・点数：専門教科－20点

講演1：尿細胞診の視点から見る尿沈渣 ～その細胞、がんじゃない？～

講師1：金守 彰（埼玉県済生会川口総合病院）

講演2：症例提示（尿沈渣から考える）

講師2：松本 実華（自治医科大学附属さいたま医療センター）

講演3：症例提示（細胞診から考える）

講師3：成田 真一（草加市立病院）

参加人数：会員72名

出席した研究班班員：

(一般検査研究班) 藤村和夫 渡邊裕樹 柿沼智史 織田喜子 小針奈穂美 松本実華
林達矢 福島明音

(細胞検査研究班) 鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 小川弘美

研修内容の概要・感想など

今回の一般検査研究班研修会は「尿沈渣検査を始める前に③～異型細胞について～」をテーマに、金守氏・松本氏・成田氏を講師に迎え現地開催をした。細胞検査研究班と合同研修会に伴い、細胞診や病理検査に携わる多くの参加者があった。

講演1では、金守氏より、尿細胞診からの視点で「尿路系の悪性細胞」を中心に講演がなされた。尿沈渣検査は悪性と思われる細胞が出現すると「異型細胞」と報告し「尿路上皮癌疑い」や「腺癌疑い」などと、コメントを付加する。尿細胞診は「異型細胞」の報告にさらに、良性細胞か悪性細胞か、といった鑑別も非常に重要な報告となる。悪性度分類についても詳しく説明がなされた。「低異型度尿路上皮癌(LGUC)や高異型度尿路上皮癌(HGUC)」があり、組織型分類とは独立した分類であり、再発や進展に関わる重要な指標となっている。また結合性・不規則重積も「高分化・中分化・低分化」といったGrade分類の鑑別となる。

講演2では、松本氏より尿沈渣検査からの視点で「症例提示」がなされた。尿沈渣検査における鏡検は、「背景」で血性・炎症性を、「細胞配列」で冊状・まリモ状・シート状・蜂の巣状・不規則重積性を、「細胞質」で細胞の由来の同定を、「核」はほとんどの異型細胞では核異常がみられる。「核小体」が目立っているのか、などといった尿沈渣における鏡検の順序や鑑別ポイントが挙げられた。

症例では同一検体で検査された尿沈渣検査と尿細胞診の両方ともに細胞数が少ないが高異型度の診断がされたとのことだった。このことから、沈渣中に細胞数の出現少なくてもその中に異型細胞が出現している、ということを常に想定し沈渣をみる必要がある。

講演3では、成田氏より細胞診の視点から膀胱上皮内癌(CIS)を詳細に説明された。膀胱の内側の表面に発生する癌で、高度な異型を示す細胞から構成されており、進行が早く画像検査では検出されにくく、肉眼的血尿を伴うことが多いが無症候性の場合もある。そのため尿沈渣検査は尿細胞診と比較し検査時間が早いことを利点に、見落としがないように各所見の細胞の見方を、「コマ送り」で画像を動かしながら説明があった。特に悪性の核は不整で凹凸や切れ込みがあり、ピントを変えた際に核の形が変わる立体不整がある。

「正常細胞、クロマチン増量細胞、好中球、クロマチン高度増量細胞」これらの大きさなども、なかなか比較することができないので、大変参考となった。

最後に尿検査は、一般検査の尿沈渣検査にて異型細胞が疑われると、病理検査の尿細胞診へ依頼。そこでクラス分類し、生検を行うプロセスである。尿沈渣検査で尿細胞診より比較的短時間で結果報告ができるメリットを最大限活かせるよう、細胞形態の知見をより広げ、知識の引き出しを数多く作っていきたいと考える。

また尿沈渣検査と尿細胞診のこれら二つの検査はそれぞれに役割を持ちながら、連携して腎臓や尿路系の疾患の診断に役立てられるようにしたい。

(文責：織田喜子)

テーマ 見て学ぶ菌株供覧 ～ 細菌同定の基礎 ～

主催 公衆衛生検査研究班・微生物検査研究班合同

実施日時：2025年9月27日 14時00分～16時00分

会場：BML総合研究所 多目的ホール/細菌検査室 教科・点数：専門教科－20点

講師：坂田 竜二(株式会社ビー・エム・エル総合研究所)

参加人数：会員28名

出席した研究班班員：

(公衆衛生検査研究班) 菊地孝司 鈴木由美子 坂田竜二 佐藤和 吉田翔平

(微生物検査研究班) 今井芙美 佐々木真一 伊吹早紀

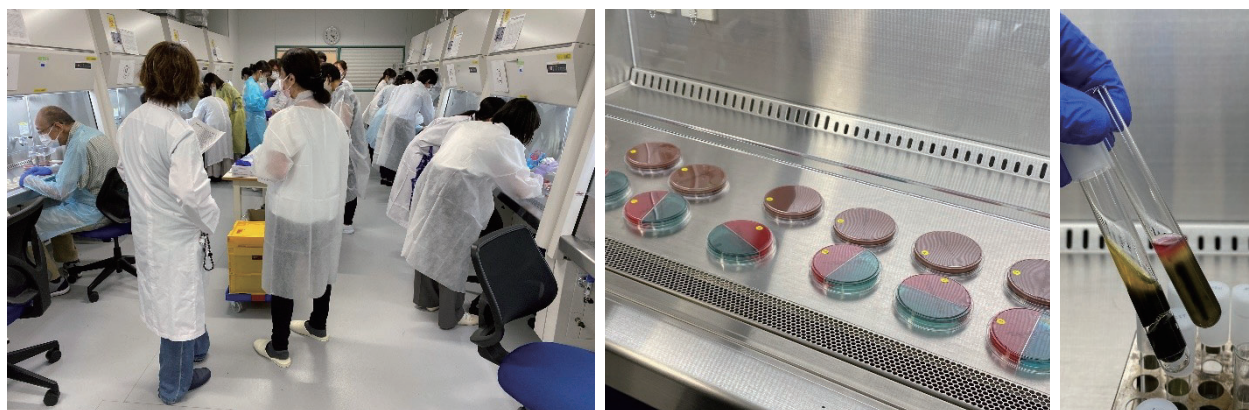
研修内容の概要・感想など

今回の研修会は公衆衛生検査研究班と微生物検査研究班との合同で、講義から菌株供覧という流れで開催し、研修会後には興味のある方を対象にビー・エム・エル総合研究所のラボツアーを実施した。

坂田氏の講義では、準備した菌株と培地の紹介や、感染対策について諸注意があった。コロニーとグラム染色の写真や、TSI培地・SIM培地などの確認培地を観察するポイントについて説明があり、供覧時に役立つ内容であった。また、講義のなかで特定病原体第3種、バイオセーフティレベル3に指定されている*Burkholderia pseudomallei*を今年に入って検出したとの情報共有があり、日数の経過とともに皺が目立つコロニーの写真や、グラム染色で両端が濃染するグラム陰性桿菌の写真について解説があった。医療機関においてもこのような菌種に遭遇する可能性が示唆され、早期に対応するためには形態や特徴を知っていることが必要とのことであった。

菌株供覧は安全キャビネット内に用意した培地を、参加者が自由に確認できる形式であった。菌株は腸内細菌を中心に、グラム陽性球菌（ブドウ球菌、レンサ球菌、腸球菌）、ブドウ糖非発酵菌、真菌（*Cryptococcus neoformans*、*Candida*属）などから、*Salmonella* Typhi、*Shigella sonnei*、*Vibrio cholerae*、*Listeria monocytogenes*、*Neisseria gonorrhoeae*、*Neisseria meningitidis*などの病原微生物まで約60種であった。培地は血液寒天培地、BTB寒天培地、チョコレート寒天培地を基本とし、菌種によって選択培地や生化学的性状による同定に必用な確認培地が追加で用意され、特徴を整理しながら観察することができた。また、赤色色素を産生する*Serratia marcescens*や、硫化水素を産生する大腸菌なども用意され、非産生株と対比できるようになっていた。硫化水素を産生する大腸菌は質量分析で同定確率99.9%とのことであり、BTB寒天培地などのコロニーからは大腸菌としか思えなかったが、TSI培地やSIM培地では硫化水素の産生を確認することができ、自分の常識には無かった経験を得ることができた。

今回、ビー・エム・エル総合研究所の全面的な協力のもと、コロナ禍になってから初の菌株供覧を開催した。質量分析が普及しつつあるなか、本研修会を通して形態の重要性を改めて認識した。また、参加者同士や参加者と研究班員のコミュニケーションの機会にもなり、大変有意義な時間となった。



(文責：吉田翔平)

**令和7年度
公益社団法人埼玉県臨床検査技師会
第7回 理事会議事録**

日 時：令和7年10月9日(木) 19時00分より

場 所：埼臨技事務所

さいたま市浦和区領家7-14-7

議 題：Ⅰ．行動報告 Ⅱ．報告事項
 Ⅲ．承認事項 Ⅳ．議題

出 席：(理事)松岡 猪浦 山口 濱本 阿部
 西田 三木 佐瀬 網野 藤原
 伊藤 塚原 神嶋 笛木
 長谷川 神戸 小林 工藤
 久保田 長岡 原 土田

欠 席：(監事)島村 細谷

本日の理事会の出席者は22名であった。理事の出席者は22名で、現在22名の過半数に達しており、定款第33条第1項の決議を行うに必要な要件を満たしていることを確認した。

議長は、定款第32条第1項より、松岡優会長が務めることとなった。

Ⅰ．行動報告

(令和7年9月11日～令和7年10月8日)

9月11日(木)令和7年度第6回理事会：

松岡、猪浦、山口、濱本、阿部、
西田、三木、佐瀬、網野、伊藤、
藤原、塚原、神嶋、笛木、長谷川、
神戸、小林、工藤、久保田、長岡、
原、土田、島村、細谷

9月13(土)～14日(日)日臨技認定試験打ち合わせ：猪浦

9月15日(月)一都八県会長会議：松岡、猪浦

9月17日(水)HP業者打ち合わせ：濱本、塚原

9月18日(木)埼玉県医師会精度管理事業臨時会議：松岡

9月18日(木)さいたま市保健所立ち入り調査：山口

9月19日(金)青年部委員会 (Zoom会議)：神戸、塚原

9月20日(土)HPリニューアルに伴う業者面会：濱本、塚原

9月25日(木)さいたま市保健所立ち入り調査：山口

9月25日(木)検査室管理運営委員会研修会：塚原、長谷川

9月26日(金)2026年度日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会 (第62回)

第3回準備委員会：

松岡、猪浦、阿部、西田、三木、
佐瀬、網野、藤原、塚原、神嶋、
笛木、長谷川、神戸、小林、工藤、
長岡

9月27日(土)第3回日臨技理事会：猪浦

9月29日(月)第20回深谷市福祉健康祭り実行委員会：笛木

10月6日(月)第2回研究班運営委員会会議：

松岡、猪浦、山口、濱本、長岡、
久保田、塚原、長谷川、神戸、
小林、工藤、原、土田

Ⅱ．報告事項

1 事務局

- 1) 9月19日(金)埼臨技徽章が納品された。
- 2) 来年度の会誌カラーは「赤」とした。

2 総務部

- 1) 9月17日(水)HPリニューアルに伴う業者と打ち合わせを行った。(別紙資料1)
- 2) 10月15日(水)だより第557号発行予定。
- 3) 10月19日(日)タスクシフト指定講習会(埼玉県 037)を開催予定。
：佐瀬、神嶋、長岡、藤原、濱本、土田

3 事業部

- 1) 9月19日(金)青年部委員会会議を行った。(別紙資料2)
- 2) 9月25日(木)検査室管理運営委員会研修会を開催した。
- 3) 9月29日(月)第20回深谷市福祉健康まつり実行委員会に参加した。(別紙資料3)
- 4) 10月18日(土)養成校連絡協議会会議を開催予定。
- 5) 1月25日(日)ワークライフバランス推進委員会研修会を開催予定。
「聞いてみませんか？資産運用のヒント」
講演：ファイナンシャルプランナーから
臨床検査技師へのアドバイス
退職後の生活、老後、保険、お金、
あなたの準備は大丈夫？
講師：細谷 博光(細谷会計事務所)

4 学 術 部

- 1) 10月6日(月)令和7年度第2回研究班運営委員会会議を開催した。

(議事録は次回理事会にて提出)

- 2) 10月7日(火)生涯教育研修プログラム(12・1月)を埼臨技HPへ掲載した。

5 精度保証部

特になし

6 会 計 部

- 1) 令和7年度正会員費15名75,000円、入会金15名15,000円、合計90,000円の入金があった。

- 2) 日臨技より、日臨技生涯教育推進研修会助成金50,000円の入金があった。
累計499,500円/11回

- 3) 石井印刷に埼臨技だより第556号Web版12P59,400円を支払った。

7 精度管理委員会

特になし

8 一都八県会長会議

- 1) 9月15日(月)一都八県会長会議が開催された。(別紙資料4)

9 日臨技関甲信支部

- 1) 支部幹事会で日臨技へ要望・質問が支部長会を通じて回答が届いた。(別紙資料5)

10 日臨技

- 1) 9月27日(土)第3回日臨技理事会が開催された。(別紙資料6)

11 第53回埼玉県医学検査学会

- 1) 9月9日(火)第11回実行委員会が開催された。(別紙資料7)

12 2026年度日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会(第62回)

- 1) 9月26日(金)第3回準備委員会が開催された。
2) 学会予算案を日臨技に提出した。

Ⅲ. 承認事項**1 事務局**

- 1) 会員動向(令和7年度分)

令和7年10月1日現在
会員数 3,724名[令和6年度会員数3,612名]
(新入会員242名)

賛助会員 68社[令和6年度72社]

承認された。

- 2) 事務所年末年始休暇について

上記の件について、濱本隆明事務局長より発言があり、審議の結果、承認された。

2 総務部

特になし

3 事業部

- 1) 令和8年賀詞交歓会招待状について

(別紙資料8)

賀詞交歓会の会費について確定させたい

上記の件について、塚原晃事業部長より発言があり、審議の結果、会費七千円が承認された。

4 学術部

- 1) 輸血検査研究班の研修会事業変更について
事業予定『製剤の適正使用について』⇒変更後『輸血療法の実施について』

上記の件について、久保田亮学術部長より発言があり、審議の結果、承認された。

- 2) 養成校学生が埼臨技主催研修会に参加する方法について (別紙資料9)

上記の件について、久保田亮学術部長より発言があり、審議の結果、承認された。

- 3) 研究班運営マニュアル・フォルダ改訂について (別紙資料10)

上記の件について、長岡勇吾研究班運営委員長より発言があり、審議の結果、承認された。

5 精度保証部

特になし

6 会計部

特になし

7 精度管理委員会

特になし

8 第53回埼玉県医学検査学会

- 1) 生涯教育点数の付与について生涯教育委員会に依頼したい。

上記の件について、伊藤隆史学会担当理事より発言があった。審議の結果、Peatixの登録は日臨技の登録情報と合致させて入力するよう会員に周知すること、座長等生涯教育点数が異なる会員を取り纏めることを条件に承認された。

- 2) 学会PRのため市報さいたまに掲載するため上程をしたい。(別紙資料11)

上記の件について、伊藤隆史学会担当理事より発言があり、審議の結果、2025年12

月号の掲載予定だが、可能であれば「2025年11月号」に掲載を申請することで承認された。

- 3) 学会ポスターの承認をお願いしたい。

(別紙資料12)

上記の件について、伊藤隆史学会担当理事より発言があり、審議の結果、記載内容を一部修正し、改めて承認を取ることにした。

9 2026年度日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会（第62回）

特になし

IV. 議題

1 事務局

特になし

2 総務部

- 1) HPリニューアル業者の選定について（見積もり・資料は別途送付の予定）

上記の件について、濱本隆明事務局長より発言があり、審議の結果、調整中の業者2社について同様の内容で再見積もりを行い10月中に決定するとした。

3 事業部

- 1) 令和8年賀詞交歓会招待者、収支予算案について (別紙資料13)

招待者を確定させ、花束等の準備を進めたい

上記の件について、塚原晃事業部長より発言があり、審議の結果、埼玉県公衆衛生事業功労者表彰4名、優秀論文賞1名、埼臨技功労賞1名、埼臨技特別功労賞1名の7名とした。

4 学術部

特になし

5 精度保証部

特になし

6 会計部

特になし

以上で本日の議事を終了し、議長は協力を謝して閉会とした。

あ と が き

『鬼滅の刃』がまた記録を塗り替えました。最新作『無限城編 第一章 猗窩座再来』は日本国内で、公開からわずか2か月で興行収入340億円を突破し、多くの人々の心を動かしています。鬼との壮絶な戦いの中に描かれる「命の重み」や「見えない敵との闘い」は、臨床検査の現場にも通じるものがあると感じます。

私たち臨床検査技師は日々、目に見えない病気の兆しを探し、患者さんの命を守るために働いています。炭治郎たちが全集中で鬼に立ち向かうように、私たちも検査一つひとつに集中し、正確さと迅速さを追求しなければなりません。

検査結果の裏には、患者さんの不安や希望があり、その一つひとつに寄り添う姿勢が求められます。『鬼滅の刃』が教えてくれる「見えないものを見る力」を、私たちも胸に刻みながら、これからも誰かの命を支える仕事に誇りを持って向き合っていきたいですね。

(塚原 記)

